
サウザンブレスに教えて

アルティメット かずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サウザンブレスに教えて

【Nコード】

N7750T

【作者名】

アルティメット かずき

【あらすじ】

これは異世界、リーメディアの英雄譚。

北の聖王国家サシユアでは戴冠式が行われることとなった。

新たな女王の名は『イーシュ』サシユア——物語の主人公『エデュミス』サシユアの妹である。

共に育った妹の台頭を受け止められないエデュミスは、自らの心を閉ざし鬱屈した毎日を送っている青年だった。

「私は私を知らないけれど……私はあなたを知っている」

戴冠式も間近に控えたある日、エデュミスは鬱蒼とした森の中で一人の少女と出会う。かつての英雄の名を冠した一人の少女は、新たな英雄譚の幕開けとなる秘密を秘めていて……。

奇跡の風が吹くその時、その出会いが、再び世界に名も無き英雄譚を呼び起す！

『再生』

それは、実に奇妙な感覚であつた。

体の内に秘めた決意が、強く望んでいた夢が、瞬く間に消え失せていくのだ。

長い眠りから、覚めたというべきなのか。それとも、長い沈黙から解き放たれたと言うべきなのか。

己が積み重ねてきたものが音もなく崩れた。身に着けてきたものが、意味を無くしていく。

これが、喪失なのだろうか。これが、破壊なのだろうか。

体の一部が不意に軽くなる。気付けば、穴が開いていた。

時を歩み形造られ、完成されていた人の心に、穴が。

この軽さは、心の形である感情が、まるでパズルのピースのように、開いた穴から音もなく抜け落ちていったのだと解釈すると、妙に合点がいく気がした。

「……………あ」

声が掠れる。感情の発露すら、忘れてしまったからなのか。

言葉で言い表すことが出来なくなりつつある身体が、全てを物語っている。

深い眠りと沈黙は、たった一つの現実を切っ掛けに、なにもかもの終わりを告げた。

その眠りで得たものは、何もない。
その沈黙で得たものは、何もない。

故に、残ったものは、価値の見出だせぬ木偶ただ一つだった。

『再生』（後書き）

最初短編で出してしまいました。長編の間違いです。全五章です。
よろしく！！！！

一章『奇跡の風』 ヒトガタ？

一個人の部屋にして、そこは有り余るほどの面積があつた。獅子の描かれたタペストリーが壁を彩り、テーブルに置かれた水差しは丁寧に彫られた刻印が浮かんでいる。ステンドグラスから差し込む太陽光は七色に煌めき、部屋内を十分に照らしつくす。

ここはサシユア王宮、王族の階の一室である。

そこには一組の男女がいた。

男の方は、その若々しい外見から察するに十代後半と言う所だろうか。引き締まった体躯に、整った眉と切れ長い眼、真一文字に結んだ唇は仄かに赤い。黒と、特徴的な白色の折り混ざった髪は、肩を境に切りそろえられている。

彼の名は『エデユミス』サシユア』。厳しい眼光を備えてはいるが、まだまだあどけなさの残る顔つきをした、王国『サシユア』の嫡子である。

彼は厳めしい表情を崩す事なく高い天井を見上げ、広くとられた間取りの部屋内を忙しく歩き回っていた。傍から見ても彼が何かを思い悩んでいるのは明白で、同時に当面の事など眼中にないと言うのが良く分かる顔つきだった。

そんなエデユミスを余所に、まだほんのりと湯気の立っている紅茶を啜り、窓際のテーブルセットに腰かける少女がいる。枝のように細い脚の椅子に座る彼女は、落ち着きのないエデユミスと違い余裕のある澄ました顔をしている。

黒いローブととんがり帽子が、いかにも魔法使いを連想させる姿。色白で青の瞳に濁りはなく、中性的な顔つきをしている。そして何より、ロバの様にしなやかな耳先が特徴的だった。

彼女は、失われた古代の英知を知るエルフ族であり、サシユア王宮王族の階へ踏みいる事を許された臣下の一人だ。

エルフの少女は、城下で生活を勤しむ民を静かに見下ろしていた。

窓から見渡せる景色は絶景であり、まだ山頂に白の混じる山々が陽の光で煌めいている。

「アレゼル。戴冠式は、本当に三日後にやるのか？」

エデュミスは、無作為に歩きまわるのを止めるとは窓際にいるエルフの少女に語りかけた。遠くで聞こえる民の生活の音以外に、この部屋を満たすものはない。エデュミスの声は二人ではとても手に余るこの部屋に良く響いた。

エルフの少女『アレゼル』は、ティーカップから唇を放すと、少しの間をおき問いに対して小さな口を開ける。

「城下町を見てみなさい」

幼い容姿とは裏腹に、不遜な態度で彼女は言った。その返答に、エデュミスは僅かに顎を落として頂垂れる。

本当にやるのか……と。複雑な感情を心中でぼつりと呟いた。

紋章が描かれた丸テーブルを隔て、アレゼルの向かい側にある椅子へ乱暴に腰掛けてから、黙って窓の外を見る。

王城の周辺は、変わり映えもなく豊かな自然に溢れていた。活気にあふれた城下町もそうだが、そこには彼にとって当たり前の世界が広がっていた。何もかもが変わらない日常が、ただあるのみだ。

エデュミスは、視線をアレゼルに戻すと肩を竦めて一息した。

サシユア王宮の最上階より一段下である『王族の間』。エデュミスとアレゼルがいる三階の一室から見渡せる光景は、山の頂上を錯覚させるほどに圧巻だ。

下方には、多くの民が暮らす城下町『ケルナ・クルフ』があり、その四方を囲むように『竜宮の丘』と呼ばれる山岳地帯が連なっている。ケルナ・クルフと竜宮の丘の間を保つように、巨大な森林地帯『シグルエ』が見える。それら全てを一様に見渡すことができる

のは、このサシユア王宮以外他ならない。

しかしその絶景とやらも、何十年と繰り返し見続けていれば感慨も浅くなるのは仕方のないことだ。

エデユミスは唇を尖らせ、頬杖をついた。城下はいつもどおり、変わり映えのない下々の世界が広がっている。別段、何がどう変わっただの、細かい変化を感じるほど城下を見つめたことはないのだから、そうだろう、と彼には思えた。

「俺には見ただけじゃとてもしゃないが判断できないな。何がどう変わったんだ？ 見ただけで、祭り事をやる雰囲気なんてつかめるものかよ」

投げやりなその言葉には、向かい側に座る小さなエルフもカップを置いて端正な眉を曲げた。

「日常にないものが見えないの？ 煌びやかな飾りつけ、組まれた櫓……人々の表情も、活気もそう。明らかにいつもと違うわ。エデユミス、あなたももう少し周りを知る事に精を出したらどう？」

そう、感情の起伏が見えてこない口調のアレゼルに、青年は返す言葉が思いつかなかった。それがまた、苛立ちを重ねる原因ともなる。背もたれにギシリと体重を加えると、エデユミスはまるで自分を嘲るように鼻で小さく笑った。

「はっ。馬鹿だな、言われなくても周りならいつも見ているよ。それこそ、目が腐っちまうほどな！ こっちが見なくても見てくるから、不可抗力と言ってもいいほど見てる。俺は王族の気持ちもわかるが、物見櫓でジツとしている兵士の気持ちも十分理解できるぞ。それこそ、見すぎて、見られすぎて、頭がおかしくなりそうだからな！」

「……相変わらず、良くも悪くも真っ直ぐね、エデュミス。私が言っているのは、『常識の範囲』^{にちじょう}の変化を何故理解できていないのか、という事よ。毎日この部屋から城下町を見渡しているのにもかかわらず、その雰囲気の違いが理解できていないのが可笑しいから、もう少し人間^{たにん}を理解してみたらどう、と言っているのよ。人を朝晩監視しろとは微塵も言っていない。馬鹿はどっちかしら」

「長くてよく聞こえなかった。もう一度言え。最後らへんの言葉は言わなくていいぞ」

「ごめんね、今のは馬鹿には聞こえない障壁を張った声だったからね。最後らへんは張ってないけど」

「そんな都合のいい魔法なんてある訳がないだろう！！！！」

怒鳴り声をあげて感情が高ぶった所、アレゼルの淡々とした口調が、ますますエデュミスの神経を逆撫でする。アレゼルも、穏やかなティータイムに罵声を浴びせられて機嫌を損ねたようだ。

二人はお互いに睨みあった——エデュミスは犬歯を剥き出しにして唸り、アレゼルは澄ました顔つきを崩していないが目が笑っていない。

自分で撒いた種が花を咲かせたが、黒々とした醜悪な色の薔薇だったようだ。

「……ああ、もう、悪かったよ」

張りつめていた表情を崩し、エデュミスは寂しそうな顔で吐き捨てる。その一瞬だけ、白と黒が入り混じっている髪は、差し込む光の加減の所為かすべてが銀色に見えた。それは、人々の手では決し

て作り出せないと確信できる、神々しい輝きを放っている。人々が羨む美貌を持ち合わせたエルフが魅了されてしまうほど、彼に入り混じった魔性の銀は妖艶に揺らめいていた。

アレゼルは、先ほどの怒りが綺麗に霧散していくのを確かに感じた。平静を保っている自分が嘘のように思えるほど、呼び起された新たな感情は静かなものだった。

魔性の銀の魔力が消え失せていくと共に、閉ざされた思考も夜明けの空のように鮮明を取り戻していく。

「おい、悪かったって。無視するなよ……なあ、アレゼル……？」

怪訝そうに自身を見つめているエデュミスが、目の前にいた。アレゼルは、まだ少し冴えない頭を支えて彼の目を見つめた。

「……………うん。許してあげる。けれど、言葉は撤回しない。人と言う存在を、学びなさいエデュミス。あなたは、高貴なる血を受け継いでいるサシユアの嫡男。完全な人としてこの世に生を受けたのだから……………」

アレゼルは、自分に言い聞かせるように、エデュミスに説いた。完全な人として生まれ落ちた、銀の青年に。

エルフとは、世界の全てを受け継ぐ神の代理とされている。この世の理、全てを識るものとされている。

それなのに。

新たな時代から、失われた古代の知識までを網羅したエルフの少女は、たった一人の人間の感情を理解することができず、また、理解したいと願っていた。

静寂は穏やかな世界を作り出す。

やがて自嘲の笑みを浮かべていたエデュミスが、深く溜息を尽き

立ち上がった。

「ああ、分かった。理解してみる努力はするよ。それと……怒鳴ったりしてすまなかったな。駄目だな俺は、正論でもなんでも苛立つとすぐに表に出ちまう。これじゃあ戴冠式も出ない方がいいんじゃないかな」

そのひどく落胆したような態度は、しかし片隅に年相応の青年らしい愛らしさが戻っていた。アレゼルは内心でほっと一息つき、静かに答える。

「今年は運命神『サウザン』の祝福期であり、世界樹レグルスが千の年を迎える偉大な年なの。人間達の好きな、記念の年。あなたも式には参加して、神々の啓示を受けるべき」

「またそれが。レグルスレグルス……世界樹も、年齢にしてみたら老いばれもいいとこなんだろ？　いつ朽ち果てるかわかんねえ大木によくもまあ思いを託せるよ。その所為で、俺の居場所が早々になくなっちまう」

エデユミスはちらりと壁にかかったタペストリーを盗み見る。タペストリーには、金色の彩色が成された剣と盾が描かれており、その背には巨大な大木がそびえていた。

『世界樹レグルス』

レグルスは『世界の中心に根を張る聖木』として人々に崇められ、遙か昔に生誕した折、その名が世界の年号として定められたとされている。

そして今年は、そのレグルスが生まれ999年目。

数百と言う、長い月日をかけても枯れ果てぬ事のなかった大木が、神々の境地ともいえる千の大台を迎えようとしているのだ。世界の

中心で、全ての原動力とされる魔力^{マナ}を満たし続ける世界樹『レグルス』は、この世界で最も尊い存在として人々に祝福を受けると言う。運命神『サウザン』の祝福期とされる千刻みの年に、二度も辿り着くのは恐らくこの大樹が初めてのことだろうとも言われ、それが更に民の信仰に拍車をかけているのだ。

「平凡に過ごしてりや、記念日もただの一日と変わりようがないつてのに……って、またやつちまうところだった。民の心を理解しろ、だよな。少しは、考えてみるか。記念日やら、神々の啓示とやらを、な」

しかしそれを、毎日と同じだと、彼は言うのだ。

千と言う、悠久を思わせる年月。その瞬間に立ち会えるという事は、百も生き続けられるか分からない人間たちにとっては実に恵まれた事なのだろう。各地で祭りが行われるのは必然の結果と言えるのだ。

けれどエデュミスには、それが余りに無駄な事に見えて仕方なかった。彼にとって、運命神サウザンの祝福期も、世界樹レグルスの誕生祭も……変わらない日常の一つでしかないのだ。

「……はあ」

何に対しての溜息なのか、吐いたエデュミスですらわからない。偉大なる年月を歩む事に、喜びを感じる。それは、この世界に生きる人々にとっては当たり前と言える出来事だ。そんな民の心とは裏腹に、エデュミスは運命神だのレグルスなどは、『そんな事』のように思えてしまう。『そんなもの』、自分には至極、関係のない事だ。一片の興味すら沸く事がないのだ。

エデュミスは気持ちを切り替えようと、大きく伸びをした。まだ少し肌寒い春の陽気が差し込む窓辺を見て大あくびをかく。

「剣術の稽古でもはじめるか」

うだうだと考えるより、行動をした方が自分の性に合うだろう。
エデュミスが言つと、アレゼルは澄ました顔のままだった。

「今は『イーシュ』が、武道の間を使っているはず。時間を置いた
らっ。」

あくびをかいていたエデュミスは、反射的に目を細める。

「……ったく。戴冠式で忙しいのによくやるな、あの人も」

吐き捨てる様に言い、エデュミスはゆっくりと立ち上がった。

「エデュミス？ どこに行くの？」

「場所変更。シグルエで剣術の稽古だ。あそこなら、誰にも迷惑が
かからないだろ？」

言葉の節々に、棘のようなものが垣間視得る。エデュミスは足取
りこそしつかりとさせて、出入り口のドアへと歩を進めていった。

「……」

アレゼルは、遠ざかるその後ろ姿を静かに見守っていた。

蝶番の金きり音がして、ドアが閉じられる。ふわりと舞った風が、
人には不可視である魔力の動きを変えた。エデュミスの魔力は、深
い銀色に染まっていたままだった。

一人残されたアレゼルは、冷めてしまった紅茶を静かに啜る。

イーシュの話をした後にする、あの言いようも得ないエデュミスの顔を思い出していると、呑み慣れた紅茶の風味すら何枚もの薄紙に通したかのように曖昧だ。

何か一つ声でも掛けてやれば良かったかと思い、しかしアレゼルはエデュミスを氣遣う時にどんな言葉をかけてやればいいか、とんとでてこなかった。

それは、己がどんなに言葉を紡ごうと、彼の心の闇は晴れることがない事を知っているからなのか。または、己の言葉は彼に響くこととはないと諦めてしまっているからなのか。

その答えは、英知を知り尽くしたエルフにもわからなかった。

「変わり映えのない毎日が、楽しいの？」

駄々広い屋内に響く、鈴の音の様に可憐な声。誰に問うのでもなく、小さなエルフの唇は動いた。

いつその事、現状の維持に勤めていたほうがいいのかもかもしれないとさえ思ってしまう程に、代わり映えのない日々が続いている、そんな現状を憂うように。

彼の姿が消えたのを合図に、アレゼルは脱力したようにテーブルへ頬杖をついた。ムニ、と柔らかそうなほっぺたが動く。

「……私も、説教ができるほどではないか」

そう言うアレゼルは、青年と同様にはあと大きなため息をつく。

出会った当初は、悪戯好きだが優しい青年だったのに。今では斜に構えた、何事にも無関心のに捻くれ者になってしまった。

それもすべて、この聖王国家『サシユア』に身を落とした故の宿命だったのかもしれない。

例えこの先どんな変化があろうとも、その人生が変わる事のない、宿命。自身の努力ではどうする事もできない、決められた人生が明

白になっている絶望を知れば、ああにもなってしまうと思える。

これから先のエデュミスは、しっかりと教養を身に着け、国の政治を任せていけるような人物にならなくてはいけないのだ。

（結局、呪いめいた自分の運命に翻弄されるしかないのね）

アレゼルは彼の幸せを思い、彼の全てを憂う。

（どうすればいいのかしら……）

アレゼルは、自分の事のように悩んだ。エデュミス「サシユアの往く末を。

王族の末裔にありながら、その性格は余りにも国務だの王族だのと言う形式めいた事には向いていなかった。短気、そして排他的でもあるが、好きなことに対しては周囲が驚くほど前向きに生きるその姿は、見ていて清々しいほどだ。とりわけ、幼子の頃より興味をもった剣術の稽古は毎日欠かさず行なっており、筋も悪くないと騎士隊長からのお墨付きがある。

剣を振るうその勇猛果敢な姿を見ている周囲の人間も、このまま騎士にでもなればいい、とさえ感じている者が多数だろう。

だが、しかし。それも儚い夢の続きに過ぎないのは、周囲も当然も、十全に理解していることだろう。

エデュミスには、サシユアの末裔としての義務が課せられている。執政として政治を取り仕切り、国を繁栄へと導かなければならない末路の事だ。聖王国家、高貴なるサシユアの血筋は、絶対である。例えば王国の騎士でさえ身分不相応とされてしまふに違いない。

政治を取り仕切る。

アレゼルは、エデュミスの父『ジェスター』サシユアがエデュ

ミスに無茶な事を言っているをつくづく思った。上に立つものとして信頼される、それだけでもかなりの手腕が必要だろうに、執政官と言う役柄は、エデュミスにとって一段と困難を極める事だろう。

エルフ族であるアレゼルでさえ、彼の輝かしい未来が見えてこなかった。民衆の信頼が、エデュミスにはまったく言っていないほどないが故に。

『闇の眷属』——と、城下では度々耳にする機会がある。闇の眷属とは、太古に魔神を冠した召喚師が召喚した魔のモノとそれに従属する邪教を指す言葉であるが——ケルナ・クルフ城下町においては、サシユアの嫡男であり、列記とした王族であるエデュミスを皮肉った言葉としても使われていた。

(……私は……、どうでもいい)

アレゼルは、横にずれた帽子の位置を直して、前かがみになった体をおもむろに倒した。その体重では、細い背もたれでさえ、何の悲鳴さえあげない。

(そう……。あなたがどんなに変わったって……)

一度考え直すと、闇の眷属だの、彼を悩ます事柄などむしろもうどうでもよい事だと思えた。彼自身が変わって、変わるうとして、そうしたならば、また別の道が自ずと見えてくるかもしれない。ならば自分は、それに付き従うまで。

そんな思いが、ポツリと浮かんた。アレゼルは、彼の傍らに寄り添っていれば、それで良かったのだ。それは、歪みの生じた一種の愛情なのかもしれない。長年彼の傍にいた、この高潔なるエルフだからこそ至る答えだった。

一章『奇跡の風』 ヒトガタ？（後書き）

当初一部にまとめていたましたが、長くなり見栄えが悪かったの
で二つに分割しました。

一章『奇跡の風』 ヒトガタ？

頬杖をつきなおし、アレゼルは乱暴な手つきで机に文を——自身の指先で描く。面白い事に、文字を綴る彼女の指先には光琳が帯びており、机には本当に光で、それらがすらすらと描かれていく。

エルフのみが使えるとされる、『魔砲具』を用いない独自の術……『魔法』だ。

テーブルを覆う古代文字は、アレゼルが指の先端を上に向けると、ふわりと『浮いた』。まるで実態はあるが、見えない紙にでも描かれているかのような、そんな文字列だ。

「契約の盟により……」

アレゼルがボソリと呟く。宙に浮いた文字列が、横の窓に吸い込まれるようにして消えていく。すると、美しいステンドグラスは煙のように消え失せてしまった。同時に魔法の文字列も消え去り、砂塵のようにふわふわとした光の余韻が残る。

数秒の間が置かれたあと、陽気な声が、長大な部屋内に滑り込んできた。

「いやあ、わざわざ窓を開けてもらってしまいすいません。流石に外側から開けますと、窓硝子の防衛魔術に反応してしまいますからね。と、言い訳はこの辺で、遅くなって申し訳ありませんでした。あれ？ 坊ちゃんは何処に行かれたのでしょうか？ 今日には戴冠式から三日前と言う事で、これからケルナ・クルフの様子でも見に行く御予定なのですよ？」

余りにも滑稽だった。地上四階の窓枠につけているのは、魔砲具

に跨った魔女でもなく、ましてやここまで壁を伝い登ってくるような盗賊でもない。そこにいた『竜』は、かなりの大きさだった。その堂々たる姿は、既に成竜へと成長をした証なのだろう。鋭い牙と翼についた巨大な爪。赤い鱗が全身を覆う、恐ろしい容貌の竜だ。レッド・ドラゴンと呼ばれる、この地方ではもっとも見かけることの多い種族の竜だ。主に荒野地帯に生息し、性格は竜の中でも比較的温厚なものが多い。彼らは、その高い知能で人間の足とも、武器ともなってくれる。

が、幾らなんでも多種族である人間の言葉を器用に操る事は、この竜にはできない。

バサリ、バサリと翼を羽ばたかせる音が閑静な王宮に響く。

窓の外にいたのは、一匹の赤き竜と……その圧倒的な存在感を持つ竜に跨る騎士だった。分厚い鉄仮面の所為で素性が知れないが、慣れた口調でアレゼルに話しかける声は、人好きのする印象があった。

「エデュミス、稽古するって。シングルエで」

アレゼルも、エデュミスに習うように投げやりにそう言う。騎士は、仮面の覗き穴からでも見えるくらい、さも大げさに目を丸くすると声高に喉を震わせた。

「なんですって？ 止めてくださいよそこは！ イーシュ様の戴冠式は近いんですよ？ どそこのお馬鹿な国が動き始めても良い頃合いなのに、不用心すぎますし、何より俺との予定もあつたのに！ 昨晩は三回ほど言っただけです。危ないから、常に近衛の誰かがアレゼル様の傍にいてくださいって。ああ、でも『エルール』が坊ちゃんのスカウトをしているでしょう。安全と言えば、安全ですけどね。でも、二度いいますけど俺との予定があつたのにひどい！！ まったく、坊ちゃんは自覚が足りないですよ。いっつ

も言ってるんですけどね！ 高貴なる血をひいてらっしゃるんですから、余り粗野な真似はしないようにって！ まったくどうしようもないなあ！」

呆れた、と口では言っている。だが、その態度と口調はまんざらでもなさそうだった。この騎士はむしろ、率先して死地に赴き稽古に励む王子の姿を、微笑ましく思っているような気がする。家臣としては三流どころかそれ以下の答えだが、エデュミスにはそれくらいの付き合いの方が合っていると、アレゼルは素直に感じた。

「参りましたねえ。どうしましょうか」

そう言い、腕を組んでドラゴンの背にあぐらをかいた騎士。分厚い鉄仮面を取り外し、騎士はその顔を外気に晒した。

短い金髪に、口元には笑うとできる優しそうなえくぼが見える。その緩んだ表情は、口調と同じく何処か愛嬌を感じるものだった。彼は騎士だけが袖を通す事の出来る、赤と白のコントラストで描かれた鎖帷子を着ている。騎士にしては余りにも軽装だが、そこに裏打ちされた實力はアレゼルも知っている通りだ。

男の名は『クーゼⅡラグオン』と言った。

サシユア女王国の嫡子『エデュミスⅡサシユア』を守る、数少ない近衛騎士の一人だ。独断で彼専用の執事まがいの事もしているこの男は、困ったような顔をして、無遠慮に頭をボリボリとかいた。臣下としてとても儀礼の欠ける行為であるが、アレゼルは対して気に掛ける事も無く、ただ漠然と近衛騎士クーゼの言葉を待っている。その眼は、少し怖いものだ。

「……あ、お迎えに遅れてしまった理由をお聞かせしましょうか」
「そうね。あなたの所為でエデュミス、先に行っちゃったもの」

その不満げな視線を受け止めたクーゼは、少し考えるような素振りを見せてからもう一度アレゼルに向きなおった。

「実は、イーシュ様にプレゼントする為の装飾品を探しておりまして……方々の街を探索していたんですよ」

「……へえ」

アレゼルはやはり、大して興味なさそうに、自身のブロンドの髪をくるくると弄りながら聞いた。

「一応聞くけど、誰の指示でそんなものを探してたの？」

「いや、坊ちゃんが、適当に見繕って与えておけと……」

クーゼも大してあまり考えず、そう告げる。

「ふーん。そう言うのって、エデュミスには『絶対に言うなよ』とか、口止めされてるんじゃない？」

「ああそうですね。でも言い訳がみつからなかったもので……。それに、坊ちゃんの近衛が主であり余り顔なじみでない俺が、個人的にイーシュ様へ装飾品のプレゼントなんて言うのも可笑しな話ではないですか。だから、坊ちゃんには悪いですが正直な話をさせてもらった訳です。まあ、家臣と君主の禁断の愛？とか何とかがあれば、話は別だったんですがねえ……。あはは、まあそんな事も無い訳でして。それよりも……そうですね、その道中、実は美味しい菓子を見つけてきてまして、坊ちゃんやアレゼル様に頂いてもらうかと持ってきたんですよ」

頗る、口先が忙しい男だった。目まぐるしく動く口と舌の動きには、アレゼルも呆れてものが言えないほどだ。クーゼ「ラグオン」と言う男は、そう言って竜の背に縛り付けてある菓子折りをひっぺが

して差し出すのだが、

「ああ！　しかし坊ちゃんにも食べてもらいたかったんです！　やはり『シグル工森林』に行ってから、皆で一緒に食しませんか」

アレゼルからスツと菓子折りを遠ざけ、ハハハ、と笑う。

お菓子を食べる頭数にさりげなく自分も入れているのが、このクーゼと言う男でもある。一対一で話していると、それが数分の出来事でさえ頭が痛くなってくるので、アレゼルは適当な言葉を返して話を進めることにした。

「別に。今あたし、お腹減ってないからいらないわ。それより、私もシグル工に行きたいのだけれど」

クーゼを横目に、アレゼルは不機嫌な表情を絶やさず言った。クーゼはまた少し考えるように、今度は空を見上げると、菓子折りを竜の鞍にせかせかと縛り直した。それが終わると、きょとした間抜け面をアレゼルに向け、ぽんと両の手を合わせる。

「仕方ない、予定変更して行きますか、シグル工森林に。……ああしかし当然ながら、竜の背に乗るので、私の目の前に座っていただくことを了承して頂かないといけませんね。アレゼル様が落っこちたらえらい騒ぎになってしまいますから」

つまり、背後から抱きすくめられることを承知しろという事だ。

アレゼルは、人間に抱きすくめられるなどおぞましきで身が震える思いだったが、いいえ、と反発しても有無も言わずさうして連れて行かれるだろう。この男はクーゼ＝ラグオンである。貴族にも庶民にも、境界線のない男だった。それに、この男の行動に安全以外の他意はない事は、十数年の付き合いで承知済みである。

「……いいわ……不本意だけど」

人差し指にくるまった髪をほどき、アレゼルは澄ました顔をようやくクーゼに向けた。すっかり根を張っていた腰をあげ、大きく伸びをする。色々と考え事をしていて、久しぶりに体を動かすものだから、少しだけ違和感を感じた。その違和感の合間に、ふと思いだす。

「……そう言えば」

竜の背に乗り、いつの間にか膝をつくクーゼを見て、アレゼルは呟く。

「帝国の方は、どうなの？」

その一言を聞き、金色の髪の騎士は、すぐさま態度を一変させた。心に芯が入ったかのように、空気が張りつめたのが何となくだが、アレゼルも分かった。

「一応、我が国の戴冠式に現れるそうですよ。流石に皇帝直々にではなく、王子である『レンティール皇太子』、そして騎士將軍の『ヴァネル』センチネル」

穏やかな表情だったクーゼは、いつの間にか引き締まった、本来の騎士である表情に成り代わっている。先ほどの緩くぼやとした雰囲気は消え、まるで相手を射殺するような……内に秘めた獰猛さを前面に出した眼差しを携えている。

アレゼルは、その変化に少し思う所があるが、あえて口にはしなかった。器用に窓枠に飛び乗り、クーゼに手を差し出す。そんな小

さなエルフに手を貸すと、クーゼは言葉の最後にこんな事を付け加える。

「……皇太子レンテイルの近衛騎士も、護衛と称して現れるみたいですね。あの男には、申し訳ありませんが、アレゼル様も警戒をしてみてください所です」

竜がその巨大な翼を大きくはためかせる。クーゼの背にもたれながら、アレゼルは晴れ渡る空をぼんやりと見つめながら、相槌をうつ。

「……解ったわ」

クーゼもこくりと頷くと、赤き竜はゆっくり飛翔しはじめた。小さく見える城下町を見降ろしながら、アレゼルとクーゼを乗せた竜が勢いよく動き始める。

まだ風の冷たい、千年目の祝福期の三日前のことであつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7750t/>

サウザンプレスに教えて

2011年10月5日17時15分発行